

序文

経絡臓腑学説は中医基礎理論の核心である。経絡の重要性は、それが人体の内外・上下・左右の交通をはかり、内に生じた病を外に発露させ、外からの治療を内に到達させることにある。ゆえに古人は「学医不知経絡，開口動手便錯」（医学を学んで経絡を知らなければ，口を開いても手を動かしても間違っただけになる [『扁鵲心書』巻上・当明経絡]）と述べている。経絡の主体は十四経脈である。『内経』『難経』には十四経脈病候を主題として取り上げている論篇があるが，両書の他の論篇部分にも経脈病候に関する内容は散見される。後世になると経絡病候に対する研究成果を記したものはさらに多くの書籍に散見されるようになり，そのすべては整理がなされていない。それゆえに今日の中医診断学・鍼灸学における経絡弁証の論述は『内経』『難経』におけるいくつかの論篇の内容を除いては，ほとんど他に述べられるべき内容もなく，他の弁証方法と比較した場合，明らかな内容不足があると言わざるを得ない。いま，張吉教授らの研究によって，まさに，この2千年にわたり未解決のままであった大きな学術問題が解決されるに至った。しかも，十四経取穴法則の研究は，鍼灸弁証論治の特色を際立たせ，中医診断学および鍼灸学の発展に対し，大きな理論的意義と臨床実践的意義を有するものである。この研究内容は非常に多くの文献を引用し，詳細で根拠のある内容が示され，理にかなった分析および総括がなされている。本研究の成果は現在における国内の学術レベルをはるかに越えている。

元世界鍼灸学会連合会会長・終身顧問 王 雪苔

（本序文は1987年から張吉氏が責任者として担当した国家教委博士点基金会科研課題「十四経病候弁証及取穴規律」の研究成果に関して王雪苔氏が述べた論評である）